

「人体標本を用いた解剖学実習」についての調査報告（2023年度）

坂本宏史¹，大塚篤也¹，小川麻里子¹，関口賢人¹，成 昌燮¹，志茂 聡¹

¹健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

Report on the Anatomy Lab Practicum Using Human Cadavers in 2023

SAKAMOTO Hiroshi, OHTSUKA Atsuya, OGAWA Mariko,
SEKIGUCHI Yoshihito, SEI Shosho, SHIMO Satoshi

要 旨

我々は健康科学大学（以下、本学）主催の「2023年度医療専門家のための人体解剖学講習会」（以下、講習会）を、2024年3月に行った。この参加者に対して、属性（職種・臨床経験年数・担当患者数・講習会参加経験数）、講習会への必要度・達成度・指導方法及びプログラムへの満足度、及び改善すべき点などを調べる質問紙調査を行った。

また、本学の解剖学の講義と実習を終了した看護学部、健康科学部リハビリテーション学科（作業療法学コース、理学療法学コース）の学生を対象に、上記の時期に解剖学見学実習（以下、見学実習）を行った。そしてこれらの学生についても質問紙調査を行った。

「講習会」について、例年に比べ参加人数が少なかったが、臨床経験の長短にかかわらず概ね満足を得られていることが分かった。

「見学実習」は、参加者が解剖学の知識を確認する機会であり、人体構造の個体差について気づく機会であった。さらに、人間を対象とする医療者の意識を学ぶ貴重な機会となっていることもうかがわれた。

キーワード：人体解剖実習，コメディカル，臨床経験，解剖学の必要性

I. はじめに

健康科学大学（以下、本学）では、山梨大学医学部の協力を受け、人体標本を用いた解剖学実習を行っている。これは本学の卒後研修プログラムにも位置付けられ、医療専門家となった卒業生等を対象に人体解剖学講習会（以下、講習会）として年1回開催されている^{3), 4), 5)}。卒業後、診療に従事する中で生じた解剖学的な疑問などを検討する機会となっている。この報告では、2023年度（2024年3月開催）講習会終了後に行った質問紙

調査を集計し、講習会改善のための材料を提供したい。

一方、本学では健康科学部・看護学部開設以来、解剖学の講義・実習終了後、学生（1年次）を対象とする人体解剖見学実習（以下、見学実習）を行っている。上述の「講習会」とは異なり、参加者全員に、引率教員が器官・臓器について、専門領域ごと要点の解説を行ったのち、小グループに分かれて実習を進めている^{5), 7), 9)}。ここでは、2023年度見学実習参加学生を対象に行った質問紙

調査をまとめ、見学実習に対する評価と今後について検討する。

Ⅱ. 方法

1. 人体標本を用いた解剖学実習のプログラム (実施内容)

以下、卒業生等を中心とした講習会と、在学生を対象とした見学実習について、プログラムにおける進行方法と質問紙調査内容を述べる。

1) 講習会

日程と方法：1日の講習会であり、以下のとおりA（発展コース）、B（基礎コース）並行しての進行であった。また、各参加者の興味に応じ、A、B間の移動も可能とした。

【A・B 共通プログラム】

9：10～10：00 挨拶、概要説明（講習会の目的、進め方、死体解剖保存法、献体制度）、実習準備

12：00～13：10 昼食

13：15～14：15 実習講義「足部の機能解剖と臨床」について

17：00～ 後片付け、清掃

【Aのプログラム】発展コースでは参加者が自身のペースで標本観察することとした。

10：00～12：00 解剖標本観察

14：15～17：00 解剖標本観察

【Bのプログラム】基礎コースでは人体の基本的構造の理解を目的とした。

10：00～12：00 上・下肢の局所解剖（講師の説明を聞きながら実習）

14：15～17：00 体幹（背・胸・腹部）の局所解剖（講師の説明を聞きながら実習）

2) 見学実習

対象及び日程と方法：対象は理学・作業療学科1年次生85名（二日に分け、1日目Aクラス46名は理学療学科が32名、作業療学科が14名；2日目Bクラス40名は理学療学科が28名、作業療学科が12名であった）、及び看護学部1年次生60名であった。各々、一日で行い、90分×4コマでの構成であった。概要説明（講習会の目

的、進め方、死体解剖保存法、献体制度）に続き、参加学生は、2-3名のグループを作り、教科書を参考に、以下の①～⑨について同定・観察し、メモやスケッチを残すことを課せられた。

① 全身のおもな筋肉の形態、位置関係、支配神経の観察：四肢及び体幹においてできるだけ多くの筋肉を同定する。

② 腕神経叢、腰・仙骨神経叢の構成と支配領域の観察：特に筋皮神経、尺骨神経、正中神経、橈骨神経、腋窩神経、長胸神経、肩甲上神経、大腿神経、閉鎖神経、上殿神経、下殿神経、坐骨神経、脛骨神経、総腓骨神経、深腓骨神経、浅腓骨神経

③ 心臓、肺、大血管、それぞれの関係の観察、縦隔

④ 横隔膜の構造と動きの理解

⑤ 腹部内臓の観察、腹膜の構造の理解

⑥ 上肢と下肢の関節の内部構造の観察

⑦ 脳神経・脊髄神経の構造：特に脊髄神経節、馬尾

⑧ 自律神経系の理解：特に迷走神経、交感神経幹、腹腔神経節

⑨ 中枢神経系と髄膜の理解

3) 質問紙調査

質問紙は、講習会及び見学実習後に、各参加者にオンラインで配布し、記入後送信してもらった。質問紙は講習会参加者の場合、以下（1）の各項目、見学実習学生の場合は、以下（2）の各項目からなっている。

（1）講習会参加者

① 参加者の属性（性別・年代・職種）、臨床経験・担当患者数・講習会参加経験数

② 選択したコース（発展コース：参加者が各々の課題を解決するために、自身のペースで課題対象を実習／基礎コース：主催者が実習対象を指定して解説後、参加者が確認）

③ 講習会の必要性（4段階評価及び自由記述）

④ 講習会での目的（選択肢）

⑤ 講習会を終えての達成度（5段階評価）

⑥ 目的を達成できなかったと思う場合の理由（選択肢）

- ⑦ スタッフの対応に関する満足度（5段階評価）
- ⑧ プログラムについての満足度（5段階評価）
- ⑨ 要望（選択肢を提示及び自由記述）
- （2）見学実習参加者
 - ① 所属学科
 - ② 見学実習の必要性（実習前）（4段階評価）
 - ③ 見学実習の必要性（実習後）（4段階評価）
 - ④ 実習についての満足度（5段階評価及び自由記述）
 - ⑤ 教員（指導法）への満足度（5段階評価）
 - ⑥ 実習時間について（3段階評価）
 - ⑦ 実習を通して最もよかったこと（自由記述）

2. 質問紙の集計・解析について

質問紙各項目への回答結果は数的にまとめ、自由記述欄については、記載された語と頻度が一目でわかるようにクラウド表示で可視化した。

（1）講習会参加者

参加者の属性、職種及び臨床経験年数・延べの担当患者数・これまでのセミナー参加回数を集計した。また、前回までの報告^{3), 4), 5)}を参考に「臨床経験の少ない群：臨床経験5年未満群」、「臨床経験の多い群：臨床経験5年以上群」で、質問紙項目への回答を検討した。

（2）見学実習参加者

質問紙には所属学科がわかるように、学籍番号を記入してもらったが、個人が特定されない配慮を行ったうえで、回答を集計・検討した。

3. 倫理的配慮

本研究は、健康科学大学研究倫理委員会による研究計画の承認（令和5年2月17日 承認番号：R4-010号）を得ている。すなわち、研究参加者には、研究目的・方法・参加は自由意志で拒否による不利益はないこと及び個人情報の保護について、口頭で説明を行ない質問紙への回答をもっての同意を得た。

Ⅲ. 結果

以下に、卒業生等を対象とした人体解剖学講習会及び、在学生を対象とした解剖学見学実習について、質問紙への回答結果をまとめた。

1. 人体解剖学講習会の回答結果

参加者全員からアンケートの回答が得られた（回収率100%）。

1) 参加者の属性

参加者は、15名中11名が男性、4名が女性であった。また、年代構成は、20代が10名（69%）、30代が3名（19%）、40代が2名（13%）であった。

職種は、作業療法士が6名、理学療法士が9名であった。

また、週単位の診療患者数（延べ数）は、10人以上30人未満が3名、30人以上50人未満が3名、50人以上70人未満が6名、70人以上が3名であった。

さらに本講習会への参加経験（回）数は、0回が2名、1回が3名、2回以上5回未満が5名、5回以上が5名であった。臨床経験年数は、図1-1のとおりであった。

2) 講習会で選んだコース

臨床経験年数の分布（図1-1）と前回までの報告^{3), 4), 5)}を参考に、臨床経験5年未満群と5年以上群に分けて、設問②以下の回答を集計した。

<5年未満群>

午前・午後ともに発展コース

1名（臨床経験2年以上5年未満）

午前・午後ともに基礎コース

3名（全員臨床経験1年未満、1名は未経験）

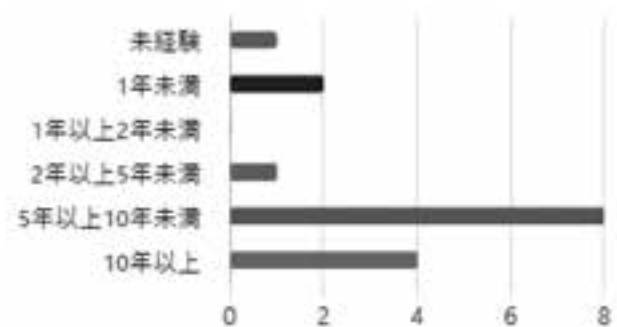


図1-1 参加者の臨床経験年数の分布（人）

<5 年以上群>

午前・午後ともに発展コース 12名（全員）

3）講習会の必要性

（1）このような講習会を必要と感じる時はどう
いう時か（自由記述）

自由記述からは、図 1-2 のような語が抽出（テ
キストマイニング）され、最も多い語は「イメ
ージ」で、全体で 4 人（27％）の参加者が記述して
いた。次に「筋肉（3 人、20％）」で、「徒手療法
（2 人、13％）」、「電気刺激療法（2 人、13％）」、「参
考書（2 人、13％）」同数で続いた。以下のよう
な記述が見られた。

- ・関節を動かした時の筋、骨の動きや姿勢を細か
くイメージするのに役立つと感じた。また、臨
床での疑問の解決になると感じた。（臨床経験
5 年以上）
- ・自分が触っている筋肉の走行の再確認や神経支
配の再確認。治療中でのイメージを頭の中で
具体的に作れるようにしていくために必要と考
える。（臨床経験 5 年以上）
- ・徒手療法、電気刺激療法（臨床経験 5 年未満）

（2）必要性に関する 4 段階評価

臨床経験年数（5 年未満群と 5 年以上群）で分
けると以下の様な結果であった。

<5 年未満群>

ほとんど必要としない	0 名
あまり必要としない	0 名
必要	2 名（66.6％）
大いに必要	1 名（33.3％）

<5 年以上群>

ほとんど必要としない	0 名
あまり必要としない	0 名
必要	2 名（16.7％）
大いに必要	10 名（83.3％）

4）講習会での目的

基本的な運動器の構造
14 名（5 年未満群：3 名（全
員）、5 年以上群：11 名）

基本的な脈管の構造／走行
9 名（5 年未満群：2 名、5
年以上群：7 名）

基本的な結合組織の構造
9 名（5 年未満群：1 名、5
年以上群：8 名）

傷害に関連する構造／走行
9 名（5 年未満群：1 名、5
年以上群：8 名）

傷害に関連する構造／配置
7 名（5 年未満群：2 名、5
年以上群：5 名）

傷害に関連する運動器の構造
7 名（5 年未満群：0 名、5
年以上群：7 名）

基本的な臓器の構造／配置
5 名（5 年未満群：1 名、5
年以上群：4 名）

その他
1 名（臓器の構造理解、5 年
以上群）

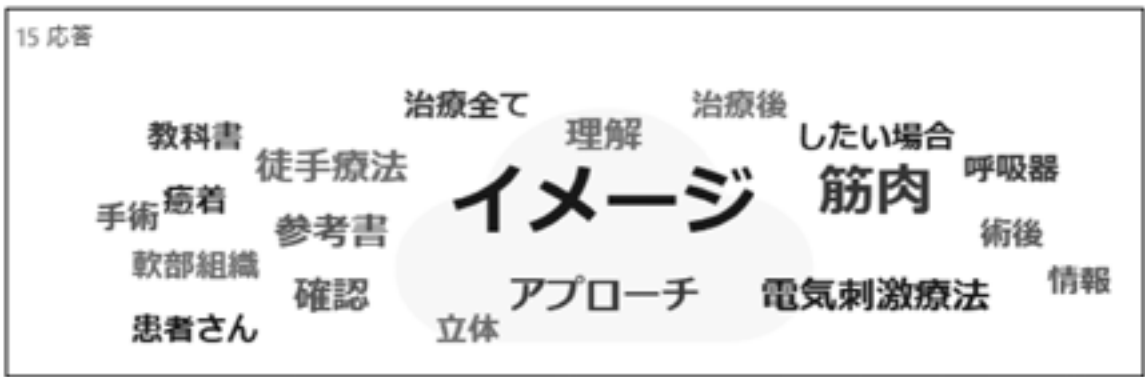


図 1-2 講習会の必要性—自由記述からの抽出語

5) 目的の達成度

臨床経験年数（5年未満群と5年以上群）で分けると以下の様な結果であった。

<5年未満群>

60%以上80%未満 3名（全員）

<5年以上群>

80%以上 8名

60%以上80%未満 3名

40%以上60%未満 1名

6) 目的を達成できなかった理由

臨床経験年数（5年未満群と5年以上群）で分けると以下の様な結果であった。

<5年未満群>

確認したい課題が多い 1名

準備すべき知識が足りなかった 2名

<5年以上群>

確認したい課題が多い 5名

準備すべき知識が足りなかった 4名

標本が、わかり難かった 1名

7) スタッフの対応に関しての満足度

臨床経験年数（5年未満群と5年以上群）で分け以下の様な結果を得た。

<5年未満群>

とても満足 2名

満足 1名

<5年以上群>

とても満足 8名

満足 4名

8) プログラムについての満足度

<5年未満群>

とても満足 2名

普通 1名

<5年以上群>

とても満足 9名

満足 3名

9) 要望

もっと臨床的な講義を聴きたい

9名（5年未満群：2名，5

年以上群：12名）

もっと基礎的な講義を聞きたい

1名（5年未満群：1名，5

年以上群：0名）

時間が足りない 3名（5年未満群：0名，5
年以上群：3名）

最初から解剖する機会が欲しい

8名（5年未満群：1名，5
年以上群：7名）

さらに丁寧に説明してほしい

4名（5年未満群：0名，5
年以上群：4名）

2. 解剖学見学実習の回答結果

1) リハビリテーション学科（理学・作業療法学コース）

79名の参加者（理学療法学コース（以下，理学）：56名，作業療法学コース（以下，作業）：23名）から有効な回答が78名分（理学：55名，作業：23名）集められた（回収率98.7%）

(1) 見学実習の必要性（実習前）（図2-1）

あまり必要としない

7名（理学：5名，作業：2名）

必要

45名（理学：34名，作業：14名）

大いに必要

26名（理学：19名，作業：7名）

(2) 見学実習の必要性（実習後）（図2-2）

ほとんど必要としない 1名（作業）

あまり必要としない 0名

必要

22名（理学：17名，作業：5名）

大いに必要

55名（理学：38名，作業：17名）

(3) 実習についての満足度（5段階評価および自由記述「満足を選んだ理由」）

① 5段階評価

とても満足 40名（理学：29名，作業：11名）

満足 22名（理学：13名，作業：9名）

普通 15名（理学：12名，作業：3名）

不満 0名

とても不満 1名（理学）

② 自由記述

67名から応答があり，「満足を選んだ理由」の文章から，記述された「語」を図2-3〈Aクラス〉・図2-4〈Bクラス〉のように抽出した（テ



図 2-1

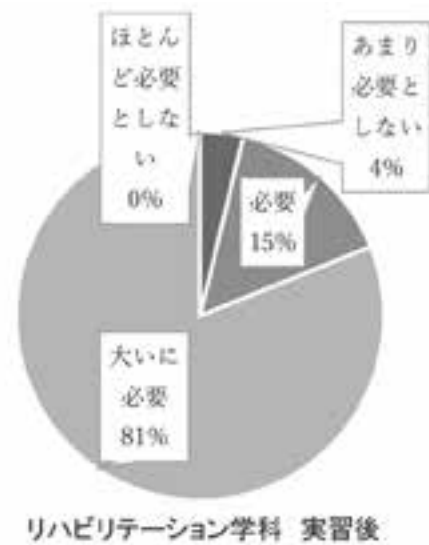


図 2-2



図 2-3 実習についての満足度—自由記述からの抽出語 <A クラス>

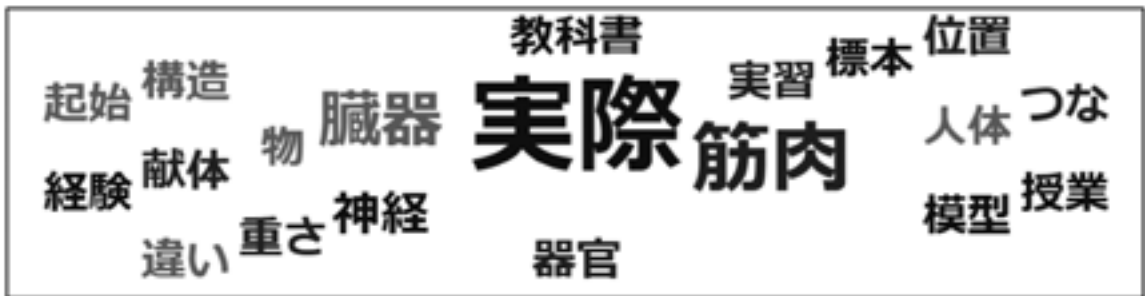


図 2-4 実習についての満足度—自由記述からの抽出語 <B クラス>

キストマイニング)。

「筋肉 (19名, 28%)」が最も多く記述され, 次いで, 「実際／実物／本物 (16名, 24%)」「教科書 (15名, 22%)」がつづいた。

(4) 教員 (指導法) への満足度 (5段階評価, 自由記述「不満の場合の理由」)

とても満足 54名 (理学: 36名, 作業: 18名)
満足 21名 (理学: 16名, 作業: 5名)

普通 3名 (全員理学)

不満 0名

とても不満 1名 (理学)

(5) 実習時間について (3段階評価)

実習時間が足りない (長くしてほしい)

2名 (全員理学)

丁度良い 72名 (理学: 60名, 作業: 22名)

実習時間を短くしてほしい

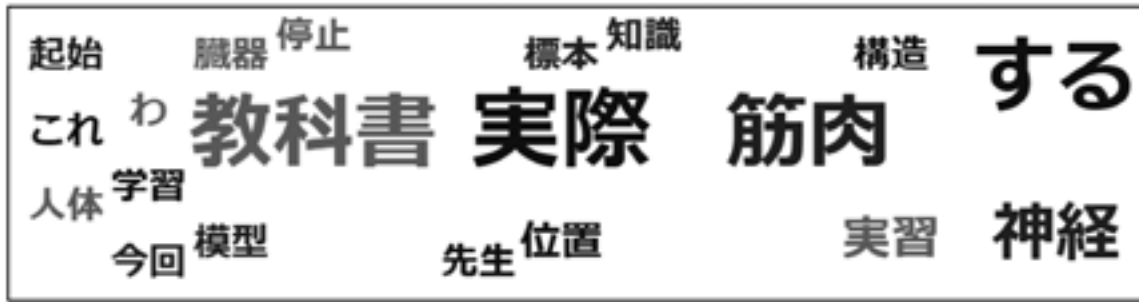


図2-5 実習を通して最もよかったこと—自由記述からの抽出語〈A クラス〉

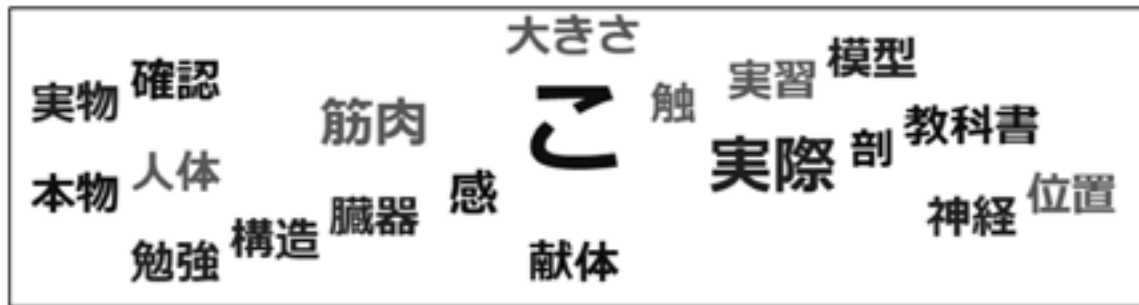


図2-6 実習を通して最もよかったこと—自由記述からの抽出語〈B クラス〉

3名（理学：2名，作業：1名）

（6）実習を通して最もよかったこと（自由記述）

78名から応答があり、「実習を通して最もよかったこと」の文章から、記述された「語」を図2-5〈Aクラス〉・図2-6〈Bクラス〉のように抽出した（テキストマイニング）。またA・Bクラスを統合して多かった抽出語の人数と割合、及び自由記述の記述例を紹介する。図2-6では、「こ」が多く抽出された（41名／44名）。自由記述欄の原文には「こと」（39名）、「この」，「どこ」（それぞれ1名）が確認され，結果はこれを反映したものであり，この設問への特異的な回答としては考え難く，検討の対象としなかった。

「実際／実物／本物（54名，69%）」が最も多く，「筋肉（40名，51%）」「教科書（34名，46%）」，「神経（29名，37%）」がそれに続いた。以下は自由記述の例である。

- ・実際に教科書で見て学ぶのと，本物の筋肉や筋，神経などを見て学ぶのでは触った感じや目で見て違いなどがはっきりわかった。また，動脈や静脈などの違いも知ることができ今後の勉強に活かせるところがよかった。

- ・一年間教科書や模型で，骨や筋肉，神経，血管などを学んできたが，実際に人の標本を用いたことによって，リアルな人の身体の全てを観察することができた。自分たちで調べながら身体の仕組みを見ていくというところがとても楽しく，また初めて知れたことも多かったので，これまでよりも知識が身についた実感がある。
- ・自分たちが実際に治療するのは人であって，標本ではないので，標本での学習ではわかりにくかった部分，みることができなかった部分を見ることができたことがよかった。
- ・内臓については，実際に見ないとわからない部分も多く，今回細かい部分まで見ることができて，人体の構造にさらに興味が湧いたし，これからの勉強へのいい刺激になった。

2）看護学部見学実習

53名全員から有効な回答が集められた（回収率98.7%）

（1）見学実習の必要性（実習前）（図3-1）

ほとんど必要としない	1名
あまり必要としない	4名
必要	26名

大いに必要	21名
(2) 見学実習の必要性 (実習後) (図3-2)	
ほとんど必要としない	0名
あまり必要としない	2名
必要	8名
大いに必要	43名

(3) 実習についての満足度 (5段階評価, 自由記述「満足を選んだ理由」)

① 5段階評価	
とても満足	36名
満足	10名
普通	5名

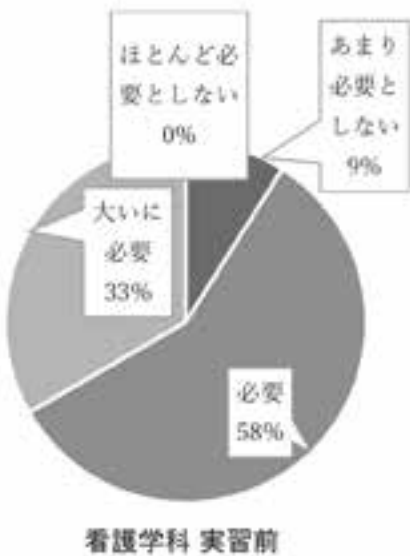


図3-1

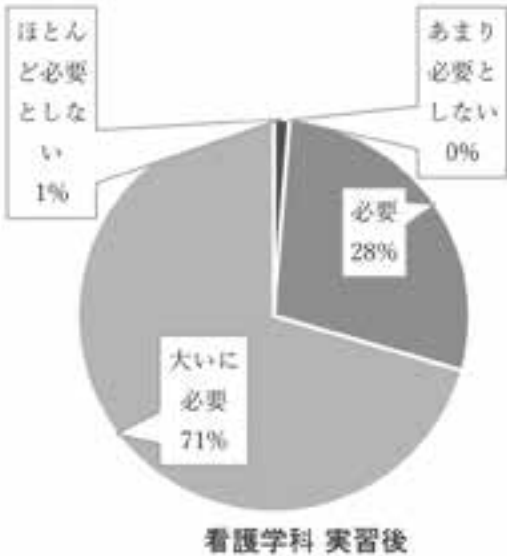


図3-2



図3-3 実習についての満足度—自由記述からの抽出語

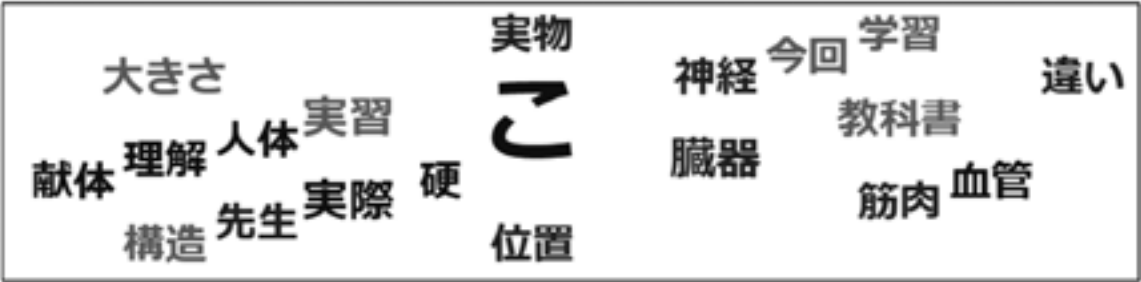


図3-4 実習を通して最もよかったこと—自由記述からの抽出語

不満 0名
とても不満 1名

② 自由記述

「満足を選んだ理由」から記述された「語」を図3-3のように抽出した（テキストマイニング）。

「教科書（16名，37%）」次いで「人体（13名，30%）」が多く記述されていた。

（4）教員（指導法）への満足度（5段階評価，自由記述「不満がある場合その理由」）

とても満足 39名
満足 10名
普通 2名
不満 0名
とても不満 1名

（5）実習時間について（3段階評価）

実習時間が足りない（長くしてほしい） 3名
丁度良い 46名
実習時間を短くしてほしい 3名

（6）実習で、最もよかったこと（自由記述）

自由記述への回答から、記述された「語」を図3-4のように抽出した（テキストマイニング）。

「こ」が最も多く抽出されたが、原文を確認したところ、回答者全員の自由記述に「こと」が含まれていた。したがって「こ」は「こと」に由来し、この設問への特異的な回答とは考え難く、検討の対象から除外した。他に多く出現した語は「臓器（23名，43%）」次いで「実習（22名，42%）」、「実際（22名，42%）」、「神経（21名，40%）」が続いた。以下に例を紹介する。

- ・今まで授業内で学んできたことを実物の標本を使って確認することが出来た。臓器が以外に小さく感じ、神経や筋肉にはどのような役割があるのか確認できた。実際に見てみないと分からない様々な発見をすることができ良かった。ご遺体を提供してくださった方々に感謝したいと思う。これからの学びでも生かしていけるようしっかり復習したいと思う。
- ・脳や臓器は普段見ることも触れることもないので貴重な体験だった。たくさんのご遺体を目の前にしたとき少し緊張したが、ご遺体によって

胃瘻の跡があったり何らかの理由で腎臓が一つしかなかったりと一体一体の生きた証が残っていることに感動した。脳や各臓器はイラストでしか見たことがなかったため新鮮だった。実際に持ってみることで重さや感触を感じることができた。

- ・この実習では、人体には個体差があるということ自分の目で観察することができたことが良かった。女性と男性では筋肉の大きさや厚さが異なっていることを観察することができた。また、血管や神経だけでなく腱の観察もすることができたことも良かった。また、大動脈や大静脈は身体の中心部にあり、周囲の臓器に守られているように位置していることを観察できたことも良かった。私のグループの献体では、下大静脈が硬化しており他の献体と比較しても触感が異なっていた。こういった個体差を観察することができたことが今回の実習では一番良かった。
- ・実際に見たり触ったりして、教科書などの説明だけでは理解できなかったところが理解できてよかった。特に、動脈硬化で血管が固くなることは知っていたが、動脈硬化ではない人との感触の違いが大きくてびっくりした。また、臓器の構造で教科書の図はわかりやすいように色を大胆に分けたりしているのだと思い込んでいた。しかし、実際に見てみると、図の通りに観察することができて面白かった。

Ⅳ. 考察

1. 人体解剖学講習会の回答結果について

1) 参加者の属性について

今回、参加者が少なく（n=15）、前回（36名）⁵⁾の半分に満たなかった。内訳は20代が最も多く10名（66.7%）で、30代3名、40代2名であった。参加者の年代構成は、本学が開学21年目であり、卒業生が比較的若いことと関係が深い。男女比については、女性の参加者が4名（26.7%）あり、これまで（2022年度は3名（0.08%）⁵⁾、2018年度は6名（17.1%）⁴⁾）に比べ多かった。

職種は理学療法士9名（60%）、作業療法士が

6名(40%)で、前回2022年度(11%)⁵⁾に比べ、作業療法士の参加が増えており、こちらも全参加者が少ないとは言え、これまでと異なっていた。

2) 講習会参加の目的について

臨床経験5年未満群、5年以上群ともに「基本的な運動器の構造」の理解が最も多く選択されていた。5年未満の参加者は、「基本的な」脈管・結合組織・臓器等の項目を選択し、「傷害に関連する運動器の構造」は、5年以上の参加者の回答のみに見られた。

今回の結果からも、臨床経験年数が長い群で「傷害に関連する」構造等を目的として挙げる傾向が見られた。

3) 講習会内容・指導方法(スタッフ対応)について

(1) 基礎コースの意義

本コースは、臨床経験の少ない参加者の要望に答えるべく、2018年度講習会から設定された⁴⁾。今回基礎コースを選んだ参加者は全員臨床経験5年未満であり、2コース制の主旨を理解してもらえていたと考えている。

(2) 目的達成度をめぐって

基礎コースの設定のなかった2017年度の結果では、臨床経験が長い群に対し、臨床経験の短い群は目的達成度を低く評価する者が多かった(有意差無し)³⁾。今回、臨床経験5年以上で達成度80%(最高)を選択した参加者が8名/12名と多かった(残りの4名は達成度60%以上80%未満)が、5年未満の参加者も全員達成度60%以上80%未満を選択しており、それぞれに達成感は得られていたと考えている。

(3) スタッフ対応への満足度

今回の調査で全員が「とても満足」・「満足」を選んだ。5年以上群、5年未満群ともに2/3以上の参加者が「とても満足」を選んでいった。

(4) プログラムへの満足度

今回、参加者全員が「とても満足」・「満足」を選択し、臨床経験5年未満・5年以上ともに高かった。

スタッフ対応/プログラムへの満足度については、2018年度以降の同じ傾向がみられ、基礎コー

スの設定の効果と考えている。

4) 講習会への要望

「もっと臨床的な講義を聞きたい」という要望は、これまでの調査で常に多く聞かれる。理想的には、講習会の日程を延ばすことも対策として考えられる。

「最初から解剖する機会が欲しい」旨の要望も、これまでと同様多く聞かれるものである。人を対象とする医療者にとって、当然の要望と思われるが、我が国の人体解剖に係る法整備の遅れに阻まれている感は否めない⁶⁾。

2. 解剖学見学実習の回答結果について

1) 見学実習の必要性(実習前、実習後)

図2-1/2-2、図3-1/3-2からも明らかであるが、見学実習の前・後で、見学実習に対する必要性の高さの変化が見られた。すなわち、見学実習後では、「大いに必要」を選択した参加者が増えていた(リハビリテーション学科:40%→81%,看護学科:33%→71%)。

大和田ら(2018)は、実習後の調査で人体解剖学実習の必要性について「すごく感じる」と答えた割合が74%であったデータを示し、人体解剖学見学実習後に理学・作業療法学の学生の学習意欲が高まったことを指摘した²⁾。今回の我々の調査により、看護学を含め、保健・医療系の学生にとって、人体解剖学実習は重要な学習機会になっていることが確認された。

2) 見学実習内容・指導方法(スタッフ対応)について

結果において「とても不満」を選んだ参加学生がリハビリテーション学科、看護学科それぞれ1名ずついた。「とても不満」を選んだ参加者について、「不満を選んだ理由」の自習記述欄に、「生徒だけでは分からないことを詳しく教えてください」旨の記述があったことから、回答は、選択ミスや設問の解釈の誤りと考えている。

「満足の理由」自由記述で具体的に書いてもらったところ、リハビリテーション学科では、「筋肉(19名)」、「神経(14名)」、「実際(13名)」、「教

科書（13名）」が多くみられ、リハビリテーション学科のみで「模型（12名）」がみられた。看護学科では、「教科書（16名）」、「人体（13名）」次いで「臓器（9名）」が多くみられた。看護学科のみ「人間（4名）」がみられた。

学科による違いは解剖学自体の学習内容の違い（リハビリテーション学科でのみ模型を使った運動器を学習する機会がある）、1年次のカリキュラムの違い（看護学科でのみ1年次から臨床医学を学習する機会がある）が影響していると考えられる。また、看護学科学生を含む「パラメディカル」の学生ではその専門によって、興味を持つ人体構造に特徴があることが示唆されている¹⁾。この報告によると、看護学生は消化器、循環器に興味関心が高く、理学療法学・作業療法学の学生は筋骨格系に興味関心が高い¹⁾。今回、調査対象は1年次の終わりの学生であったが、上の報告に沿うものと考えられる。さらに、看護学専攻の学生のみ、「人間（4名9%）」の抽出語が見られ、看護学では「人体を全体から生活体として見る『看護の視点』」が必要とされていること^{8),9)}が、表れていると推察された。

3) 自由記述で見られた「実習の意義」

「今回の実習で良かった点」への自由記述では、前述の「満足の理由」で見られた「語」と共通するもの（「教科書」「臓器」「筋肉」「実際」「実物」「神経」「人体」）が多かった。参加学生からの文章から、「教科書」の内容が「実物」の人体で確認できた喜び、「教科書」の記述では理解できなかったことが「実際」に「人体」を観察することで初めて分かった満足感が伝わった。

V. おわりに

卒後研修の一つである「医療専門家のための人体解剖学講習会」には、これまでも高い要望があった。今回も講習会参加者には、概ね満足してもらえたようである。今回特に、臨床経験5年未満の参加者が少なく、詳細な分析はできなかったが、昨年度までの調査結果と合わせ、今後の講習会の内容に反映していきたい。

学部学生を対象とする「人体解剖見学実習」で

は、初めて実物の人体を観察することの大切さを実感でき、保健・医療系学生にとって貴重な機会になっていると思われる。今後も継続していく意義は大きいと感じた。学生の専攻によっても教育方針や学生の興味・関心に違いがあることも示唆されたので、死生観や倫理観への影響を含む人体解剖学実習が持ついろいろな側面からの学習効果を理解した上で実習を進めていきたい。

VI. 参考文献

- 1) Sakamoto N, Miyaso H, Komiyama M, Sugata Y, Mori C, Shimizu E, Matsuno Y. Differences in the interest in human body structures among paramedics from various specialized fields: Development of an effective anatomical instructions, 形態・機能, 20, 19-32, 2021
- 2) 大和田宏美, 山口志津枝, 大友篤, 村上賢治, 鈴木裕治, 理学療法・作業療法学の学生に対する人体解剖見学実習の導入に伴う教育効果について, 研究紀要青葉 Seiyō 9(2), 69-75, 2018
- 3) 坂本宏史, 志茂聡, 関口賢人, 成昌燮, 川手豊子, 医療従事者における「人体標本を用いた実習」についての調査報告（2017年度）臨床経験年数の長短によるニーズの違い, 健康科学大学紀要, 14, 95-111, 2018
- 4) 坂本宏史, 志茂聡, 関口賢人, 成昌燮, 川手豊子, 医療従事者における「人体標本を用いた実習」についての調査報告（2018年度）—臨床経験年数の長短によるニーズの違い—, 健康科学大学紀要, 15, 93-104, 2019
- 5) 坂本宏史, 大塚篤也, 小川麻里子, 関口賢人, 成昌燮, 志茂聡, 「人体標本を用いた解剖学実習」についての調査報告（2022年度）, 健康科学大学紀要, 20, 11-22, 2024
- 6) 死体解剖保存法, https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80153000&dataType=0&pageNo=1（2024年10月23日）
- 7) 志茂聡, 坂本祐太, 藤田愛, 坂本宏史, 解剖見学実習の有用性, リハビリテーション教育研究, 26, 84-89, 2020
- 8) 古屋敷明美, 田村典子, 石野レイ子, 土谷美恵, 塩川華子, 大谷五十鈴, 沖田一彦, 宮口英樹, 堂本時雄, 看護学科における解剖遺体見学実習の意義, 広島県立保健福祉短期大学紀要, 5(1), 25-33, 2000
- 9) 三木喜美子, 佐野宏一朗, 乙黒仁美, 高村かおり, 竹村眞理, 看護基礎教育における解剖見学実習のあり方についての検討—解剖見学実習に関する文献から見る今日の動向から—, 健康科学大学紀要, 15, 79-83, 2019